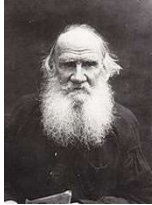


ウクライナ侵攻とサクラの花と

ロシアのウクライナ侵攻から1年が経過しました。テレビや新聞はほぼ毎日、戦況を番組や紙面で組んでいます。それらの報道によると民間の市民や軍隊の犠牲者がどんどん増えています。ウクライナの穀物やロシアの資源の輸出制限などの影響もあり当事国と直接関係のない国も含めて世界的な物価高をもたらしている。いつになったらこんな人が人を殺す馬鹿げた戦争が終わるのでしょうか。

以前にもこのページで紹介したことがあります。大河小説「戦争と平和」の中でトルストイは戦場の場面を次のように綴っています。



「・・・やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れ果てた者や、ためらっている者の上に、小雨がしとしと降り始めた。『おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ・・・いい加減で正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？』こう言っているかのようであった」(原久一郎訳)

雨に言わせた文豪トルストイの心の底からの叫びでしょう。核の使用までちらつかせて脅すプーチンはいつになったら正気に返るのでしょうか！？

加えて「ユーラシア大陸の“核の三兄弟”」の残りの二人も同列です。習近平は台湾侵攻を狙い、金正恩はやたらとミサイルを日本海に撃ち込んでくる・・・不安な時代になったものです。

ここで『戦争と平和』に合わせて私の愛読書である池田大作氏の小説『人間革命』第一巻の冒頭の一節を紹介します。

戦争ほど、残酷なものはない。

戦争ほど、悲惨なものはない。

だが、その戦争はまだ、続いていた。

愚かな指導者たちに、率いられた国民もまた、まことに哀れである。

まさに現在のロシアの実態を映し出しているようにも思えてきます。

ウォーキングで外に出ると街路のコブシの白い花が少しずつ咲き始めています。ピンク色のサクラも間もなく花を開くでしょう。水も温（ぬる）み少し春めいてきたところで高校時代の国語の教科書にあった短歌を思い出します。

「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(在原業平 * 古今和歌集)

桜がいつ咲くかいつ散ってしまうか気をもむ桜が好きでたまらない作者の心を歌った句ですがこれを本歌取りして：

「世の中（地球上）に核（悪）の三兄弟なかりせば民（地球市民）の心はのどけからまし」

美しさとも情感とも縁のない戯れ歌ですが、こんな句を詠んで心の曇りを晴らしたい気分ですね。現実的には国連がもっと力を発揮し、各国リーダーの外交努力に頼るしかないのでしょうか・・・。仮にロシア、中国、北朝鮮の独裁者がいなかったら、地球上がどれだけ平和で人々は安心してのどかな生活を送れるようになるだろうかなんてちょっと想像してみたり・・・いつも“見果てぬ夢”を追いかけている「東京のドン・キホーテ」の独り言、つぶやきです。

